

# 聖武天皇の印南野行幸と難波宮の造営

栄原 永遠男

---

**要旨** 聖武天皇は、神亀3年に難波宮に行幸し、藤原宇合を知造難波宮事に任命し、難波宮の造営に乗りだした。しかし、聖武天皇は、この行幸の前に、播磨国の印南野に行幸し、そのち難波宮にまわっている。この連続する二つの行幸には関連があるとみるべきである。聖武天皇の即位初期の行幸は、いずれも自らの皇位の正当性を明示する場所を目的地としているので、印南野行幸も同様に考えることができる。

印南野にはかつて中大兄皇子が行き、祥瑞である豊旗雲を見ている。瑞雲の著名な例として、壬申の乱のさなか名張で大海人皇子が見たものがある。聖武天皇は、この両方を知っていたはずであるが、そのうち印南野に行幸したのは、その地が、節日や鎮魂祭・大嘗祭などに供される柏の採取地であったからである。印南野の柏がこれらの王権にかかわる祭祀に使用されるのは、かつてこの地の豪族と天皇家との間に婚姻関係があり、贄が貢納されていた伝統による。

聖武天皇は、祥瑞を見るために天皇家とゆかりの深い印南野に行幸し、天智・天武天皇の後継者たることを自他ともに示した上で難波宮に行幸し、その皇位の正当性を象徴する宮として難波宮の造営を命じたのである。

---

## 1. はじめに

聖武天皇は、神亀3年(726)10月26日に藤原宇合を知造難波宮事に任命し、難波宮の造営に乗り出した<sup>1</sup>。この造営は、『続日本紀』によると、その後天平4年(732)3月己巳(26日)条に「知造難波宮事従三位藤原朝臣宇合ら已下、仕丁已上、物賜ふこと各差有り。」という記事が見え、このころには工事は画期を迎えたいらしい。また、天平6年9月辛未(13日)条には、難波京における宅地の班給の記事が見える。この時点で京域の整備が進行していたのであろう<sup>2</sup>。

このように、難波宮・京の造営は、聖武天皇のもとで着々と進められた。では、聖武天皇はなぜ難波宮を建設したのであろうか。聖武天皇の難波宮とは、どのような宮であったのであろうか。本稿では、この問題を、その直前に行われた行幸を手がかりとして考えたい。

## 2. 即位初期の行幸

まず、聖武天皇は神亀元年2月4日に即位したが、その初期の行幸に注目したい。即位後にどこに行幸するかということの中に、新天皇の統治・政治姿勢に関するメッセージが込められているはずであるからである。

その場合、即位初期としていつまでを検討の対象とするかを決める必要がある。聖武天皇は、神亀5年に難波宮に行幸したが(次にあげる⑧)、それ以後、天平6年3月に難波宮に行幸するまでの5～

6年の間、どこにも行幸しなかった。この期間を除くと、聖武天皇は在位中、ほぼ毎年のように行幸している。したがって、この5～6年の間は、行幸については聖武天皇の治世では特異な期間であったとみられる。そこで、この行幸空白期間以前の時期を即位初期としてひとまとまりの時期ととらえることは可能であろう。

神亀年間の聖武天皇の行幸を整理すると、次のようになる。

- |                |            |             |
|----------------|------------|-------------|
| ①神亀元年3月1日～5日   | 芳野宮        | 『続日本紀』      |
| ②神亀元年10月5日～23日 | 紀伊         | 『続日本紀』      |
| ③神亀2年3月        | 三香原離宮      | 『万葉集』       |
| ④神亀2年5月        | 吉野離宮       | 『万葉集』       |
| ⑤神亀2年10月10日    | 難波宮        | 『続日本紀』『万葉集』 |
| ⑥神亀3年10月7日～29日 | 播磨国印南野～難波宮 | 『続日本紀』『万葉集』 |
| ⑦神亀4年5月4日～6日   | 甕原離宮       | 『続日本紀』      |
| ⑧神亀5年          | 難波宮        | 『万葉集』       |

これによると、聖武天皇が神亀年間に行幸したのは、吉野離宮、紀伊、甕原離宮、難波宮、印南野の5個所であることがわかる。そのうち吉野離宮、甕原離宮、難波宮は2回ずつ行幸しており、聖武天皇が重視していたことがうかがえる。

吉野離宮は、言うまでもなく大海人皇子が壬申の乱に立ち上がった出発点であり、曾孫の聖武天皇にとっては、自らの皇位の正当性の原点と言える場所であった。つぎに、紀伊への行幸は、和歌浦を目的地としていた。これについては、別に論じたことがあるが<sup>3</sup>、大嘗祭の直前に和歌浦において、大嘗祭で神に供える由加物の海産物の採取を見るためであった。

甕原離宮は、元明（太上）天皇との関係で理解する必要がある。元明（太上）天皇はここに4回も行幸しており、ゆかりの深い離宮であることは周知のことであった。年少時の首皇子もそれにしたがって行ったことがあったかもしれない。元明（太上）天皇は、首皇子の即位を目指していた天皇である。その天皇と深い関係にある離宮に、即位直後の聖武天皇が行幸することには、元明（太上）天皇の意思を再確認する効果があったであろう。すなわち甕原離宮への行幸は、聖武天皇の天皇としての地位が、元明（太上）天皇によって保証されていることを示す意味があったと考えられる。

また、難波宮への行幸は、次の歌が注目される。

冬十月、難波宮に幸す時に、笠朝臣金村の作る歌一首并せて短歌

おしてる 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人皆の 思ひやすみて つれもなく  
ありし間に 続麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食す国を 治めたまへば  
沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の緒は 廬りして 都なしたり 旅にはあれども

反歌二首

荒野らに 里はあれども 大君の 敷きます時は 都となりぬ

海人娘子 棚なし小舟 漕ぎ出らし 旅の宿りに 梶の音聞こゆ (巻6-928～930)

これは、笠金村が⑤の行幸の時に詠んだ歌である。この行幸は、八十島祭のためであったとされて

いる<sup>4</sup>。八十島祭は、天皇が八十島の霊を取り入れるための祭であるので、聖武天皇の天皇としての地位を保証し強化する重要な儀礼であった。この歌で、「味経の原」の「長柄の宮」は「食す国」を治めた場所とされているが、この時八十島祭が行われたことを下敷きにしてみると、理解が深まる。

この歌では、「長柄の宮」で食国を治めたのがどの天皇の時のこととして回想されているのかは明記されていない。しかし、「八十伴の緒」が「廬りして 都なしたり」とあって京城についてふれている点に注意される。難波における京の形成については不明な点が多いが、天武朝においてある程度進展したとする見解<sup>5</sup>に従えば、初めに「長柄の宮」を作った孝徳朝だけでなく、天武朝も含んでいるとみてよい。この歌では、聖武天皇は、孝徳朝のことも念頭に置きつつ、直接には天武天皇が都したところとしての難波に行幸した、ととらえられると理解できる。

以上によると、即位初期の吉野離宮、紀伊、難波宮、甕原離宮という行幸地は、いずれも聖武天皇にとって、自らの皇位に直接関係し、その正当性を明示する場所であることがわかる。すると、残る行幸地である印南野についても、同じ方向で理解することができるのではないか、と予想できる。

### 3. 印南野行幸と難波宮行幸

そこで、印南野行幸が、聖武天皇の皇位の正当性の主張のためではないかという推定が成り立ちうるのか、改めて考えたい。『続日本紀』神亀3年9月～10月条には、次のようにある。なお、『日本紀略』では、10月7日条に『続日本紀』の欠落とみられる16文字（傍点を付した部分）があるので、あわせて示す。

壬寅（27日）（中略）正四位上六人部王・藤原朝臣麻呂、正五位下巨勢朝臣真人、従五位下県犬養宿禰石次・大神朝臣道守ら廿七人を装束司とす。従四位下門部王、正五位下多治比真人広足、従五位下村国連志我麻呂ら一十八人を造頓宮司とす。播磨国印南野に幸せむとしまふ為なり。

冬十月辛亥（7日）、播磨国印南野に行幸したまふ。

甲寅（10日）、印南野の邑美頓宮に至る。駕に従へる人と、播磨の国郡司・百姓らの行在所に供奉せる者と共に、位を授け禄を賜ふこと人ごとに差有り。また行宮の側近の明石・賀古二郡の百姓、高年七十已上に、穀賜ふこと各一斛。播磨の堺の内の大辟已下の罪を曲赦す。

癸亥（19日）、行、還りて難波宮に至りたまふ。

庚午（26日）、式部卿従三位藤原宇合を知造難波宮事とす。陪従せる无位の諸王、六位已上、才芸の長上、并せて雑色の人、難波宮の官人、郡司已上に禄賜ふこと各差有り。

癸酉（29日）、車駕、難波宮より至りたまふ。

これによると、聖武天皇は播磨国の印南野に行幸するために、9月27日に装束司・造頓宮司を任命した。そして、10月7日には早くも出発している。この間約10日の短期間であるから、実際の準備は、この任命よりも前から進められていたと考えられる<sup>6</sup>。

従駕した人や、行在所に供奉した播磨国の国郡司・百姓に位と禄を与え、行宮の側近の明石・賀古2郡の70歳以上の高齢者に穀を与え、播磨国内に限って曲赦を行なった。そして、10月19日には印南野から難波宮に移動し、同月26日には式部卿従三位藤原宇合を「知造難波宮事」に任命したのである。

「知造難波宮事」というポストは、「知～事」の間に入る「造難波宮」すなわち難波宮の造営を統括することを任務とすると考えられるから、この任命によって、難波宮の造営が本格的にスタートしたと見てよい。聖武天皇は、それを見届けて、29日には平城宮にもどった。

ここで注意すべきは、印南野行幸が難波宮行幸の前に連続して行われていることである。一般に行幸は周到な準備をへて実行されるものであるから、両者のあいだには、何らかの深い連関があったはずである。別々の行幸がたまたま続けて行われたのではなく、難波宮行幸と印南野行幸とは、はじめから何らかの連関のもとに計画されたと見なければならない。つまり、ある意図があって難波宮行幸の前に印南野行幸が行われたとみるべきなのである。では、その意図とは何か。印南野に行幸したあと、そのまま難波宮にまわったことには、どのような意味があるのであろうか。

従来、聖武天皇による難波宮の造営については、難波宮への行幸のみが取り上げられ、その前に印南野に行幸したことについては、ほとんど注意されることはなかった。しかし、この両者の関係を明らかにすることによって、聖武天皇の難波宮造営の意図を明らかにすることができる。

#### 4. 中大兄皇子の豊旗雲の歌

滅亡した百済の復興に助力するため、齊明天皇はその6年(660)12月にまず難波宮に行幸し、さらに九州に向かった。一行は、その途中、印南野の沿岸を通過した。

十二月の丁卯の朔にして庚寅に、天皇、難波宮に幸す。天皇、方に福信が乞せる意に随ひて、筑紫に幸して救軍を遣らむと思して、初ず斯に幸し、諸の軍器を備ふ。

七年の春正月の丁酉の朔にして壬寅に、御船西に征きて、始めて海路に就く。

その後船団は、1月14日に伊予の熟田津の石湯行宮に着いている。この時、中大兄皇子もこの行幸に同行して印南野の海を航行した。その往路で詠まれたとされる歌が次のものである。

中大兄近江宮に天の下治めたまふ天皇の三山の歌一首

香具山は 畝傍ををしと 耳梨と 相争ひき 神代より かくにあるらし 古も 然にあれこそ  
うつせみも 妻を 争ふらしき

反歌

香具山と 耳梨山と あひし時 立ちて見に來し 印南国原  
わたつみの 豊旗雲に 入日さし 今夜の月夜 さやけかりこそ

右の一首の歌は、今案ふるに反歌に似ず。ただし、旧本にこの歌を以て反歌に載せたり。故に、今も猶しこの次に載す。また、紀に曰く、「天豊財重日足姫天皇の先の四年乙巳に、天皇を立てて皇太子としまふ」といふ。(巻1-13~15)

この中大兄皇子の一連の歌は、それぞれさまざまの問題を含んでいるため<sup>7</sup>、万葉集研究の分野で多くの論考がある。このうち15番歌については、豊旗雲を染めて夕日が入るのを見た、その今夜の月夜は清明であってほしい(清明である)と解されている。豊旗雲とは、7世紀の貴族・知識人には顧野王の『符瑞図』によって祥瑞として知られており<sup>8</sup>、のほり旗のように長くのびて空を横切っている雲で、海神の旗、神の祝福、瑞兆を示す雲であった。

左注には、この歌は反歌らしくないが、「旧本」には反歌として載せているので、この順序で収録しておく、と記されている。また、それに続けて『日本書紀』の立太子の記事をあげている。この『日本書紀』の記事は、当面の行幸とは直接関係しない。それをわざわざあげているのは、豊旗雲が中大兄皇子の立太子を寿ぐ祥瑞であるという理解があったことを示唆する。

印南野に行幸した聖武天皇は、当然この歌を知っていたであろう。その知識が「旧本」によるものなのか、その他によるのか明らかでないが、かつて斉明天皇の行幸の時に、印南野で豊旗雲の祥瑞が現れ、中大兄皇子がそれを見て歌を詠んだことを認識していたと思われる。

瑞雲の例として著名なものがもう一例ある。言うまでもなく、壬申の乱の時、大海人皇子の一行が名張までたどり着いたとき、

横河に及らむとするに、黒雲有り。広さ十余丈にして天に経れり。時に天皇、異しびたまひ、則ち燭を挙げて親ら式を乗り、占ひて曰はく、「天下兩分の祥なり。然して朕遂に天下を得むか」とのたまふ。  
 (『日本書紀』天武天皇元年6月甲申(24日)条)

とあるものである。聖武天皇にとって、瑞兆としての雲は、大海人皇子と中大兄皇子の両方にちなむものとして記憶されていたであろう。聖武天皇の神亀3年の印南野行幸は、この二つの故事を下敷きにしていたはずである。聖武天皇は、天智天皇と天武天皇を継ぐものとして、豊旗雲の瑞兆を見るために、印南野に行幸したのである。

この時、実際に豊旗雲を見ることができたかどうかは問題でなく、かつて豊旗雲を見た天智天皇の後継者として行幸することが重要であった。しかし、それだけであれば、大海人皇子が「朕遂に天下を得むか」とまで明言したとされている名張に行幸したほうがふさわしかったかもしれない。しかし、聖武天皇は名張ではなく印南野に行幸した。それには印南野でなければならない理由があったはずである。

## 5. 印南野の柏

そこで注目されるのが、次の歌である。

七日に、天皇・太上天皇・皇太后、東の常宮の南大殿に在して肆宴したまふ歌一首

印南野の 赤ら柏は 時はあれど 君を我が思ふ 時はさねなし

右の一首、播磨国守安宿王奏す。古今未だ詳らかならず。(卷20-4301)

これは、天平勝宝6年(754)1月7日の白馬の節会の時に、孝謙天皇・聖武太上天皇・光明皇太后が東の常宮の南の大殿で宴をはったとき、安宿王が奏上した歌であるとされている。おそらくこの時の宴に播磨国の印南野の柏が使用されていたため、播磨守である彼が、いつ頃の歌かは明らかでないが、それにかかわる歌を奏上したものと考えられる<sup>9</sup>。したがって、白馬の節会の食器として播磨国の印南野の柏を用いることが常例となっていたのであろう。

節日に播磨柏が用いられることは、『延喜式』にも見える。造酒司の条には、

諸節日酒四斗、麴糟三升(正月三節以三種御糟代麴糟)、播磨柏廿把(五月、七月、九月一担)、篔竹八株、壺酒五升(五月、七月、九月、十一月各一斗)、濁酒五升(十一月一斗、五月、七月、

九月不供)、酢五升(五月、九月各一升)

とある。これによると、5月5日(端午節会)、7月7日(相撲節会)、9月9日(重陽節会)の諸節日に、播磨柏が1担ずつ供されることになっていた。上の『万葉集』の歌によると、1月7日にも用いることになっていたのであろう。また、次のように鎮魂祭、踐祚大嘗祭にも播磨柏は供せられることになっていた。

鎮魂祭料(東宮亦同)

酒二斛(一石一斗神九座料、九斗雜給料)、結饒缶木綿大一斤、播磨櫛一俵三把、都婆波四口、埴四口(別受五升)、土蓋四口、小匱四口、缶一口、篋竹六株(已上供神料)、窪杯 口(加盤)、匏十二柄(已上雜給料)、東宮並以此器通用、

踐祚大嘗祭供神料

等呂須伎十六口(口別酒五升)、都婆波卅二口(十六口別酒一斗、十六口五升、各以八口置於一案)、杷繩卅八条(十六条別二尺、十六条別一尺八寸、十六条別一尺四寸)、陶鉢十六口、繩篩十条(別一尺)、縫篩糸二分、木綿二斤八両(結饒供神物料)、麻六斤十両三分(結周中取案高闌料)、播磨櫛廿俵、韓櫃二合、中取案六脚、小楮十二担(中取案高闌料)、檜葉・真木葉各五担、弓弦葉・寄生各十担、真前葛・日蔭・山孫組各三担、山橘子・袁等壳草各二担(已上九種畿内所進)、簀五枚(中取案下敷料)、折薦五枚(料理供神物人等座料)

鎮魂祭は、新嘗祭・大嘗祭の前夜に行なわれる祭で、天皇の靈魂が身体から遊離することを防ぎ、天皇の靈魂の強化を図ることを目的としていた。踐祚大嘗祭は天皇の即位のはじめに行われる新嘗祭で、即位儀礼の一環である。

以上によると、播磨国の印南野には柏の葉が産し、それが節日の宴や鎮魂祭、踐祚大嘗祭などの天皇を中心とする重要行事に使用されていた。では、それはなぜであろうか。

## 6. 印南の別嬢の伝承

印南野の「播磨柏(櫛)」が、皇位にかかわる重要な儀式に用いられるには、それ相当の理由があったはずである。それはどのようなものであろうか。そこで思い起こされるのが、ハリマノイナビノオホイラツメに関する伝承である。『古事記』景行天皇段には、

此の天皇、吉備臣等之祖、若建吉備津日子之女、名は針間之伊那毘能大郎女に娶して、生みませる御子、櫛角別王。次に、大碓命。次に小碓命、亦の名は倭男具那命。具那の二字は音を以ゐる。次に、倭根子命。次に、神櫛王。五柱。(中略)又、伊那毘能大郎女之弟、伊那毘能若郎女に娶して、伊自り下の四字は音を以ゐる。生みませる御子、真若王。次に、日子人之大兄王。

とある。イナビノオホイラツメとその妹のイナビノワキイラツメは、それぞれ景行天皇との間に皇子をもうけたとされている。これに対応する記事が『日本書紀』景行天皇2年3月戊辰(3日)条にある。

播磨稻日大郎姫を立てて皇后としたまふ。一に云はく、稻日稚郎姫といふ。郎姫、此には異羅菟咩と云ふ。后、二男を生みたまふ。第一を大碓皇子と曰し、第二を小碓尊と曰す。一書に云はく、皇后、三男を生みたまふ。其

の第三を稚倭根子皇子と曰すといふ。

これによると、『古事記』では姉妹とされた二人は、『日本書紀』では同一人物として扱われている。一人の人物を二人に分化させたものであろう<sup>10</sup>。ここで注目すべきことが二点ある。一つは、播磨の地方豪族の女性と天皇との婚姻関係が語られていること、もう一つは、その女性が、したがってその地方豪族が吉備臣の一族であることである。

さらにこれに関連する史料として、『播磨国風土記』賀古郡にみえる比礼(褶)墓の伝承がある。長いので要点をかいつまんで示すと、次のようである。

大帯日子命(景行天皇)が印南の別嬢を妻としようとして、明石郡の廝の御井までやってきたので、「その時、印南の別嬢、聞きて驚き畏み、すなはち南毘都麻に遁げ度りき。」

天皇は、この少嶋に印南の別嬢がいることを知って、渡ろうと思った。「阿閉津に到り、御食を供進りたまふ。故れ、阿閉の村と号く。又、江の魚を捕りて、御坏物と為したまふ。故れ、御坏江と号く。(中略)勅して、「この嶋に愛妻隠びつ」とのりたまひき。仍りて南毘都麻と号く。」

「印南の六継の村に到り、始めて密事を成したまひき。故れ、六継の村と曰ふ。」

「年ありて、別嬢この宮に薨りまししかば、すなはち墓を日岡に作りて葬りまつりき。」

「その戸を挙げて印南川を度る時に、大飄、川下より来て、その戸を川中に纏き入れき。求れども得ず。但、匣と褶とを得たり。すなはちこの二物を以てその墓に葬りき。故れ、褶墓と号く。ここに、天皇、恋ひ悲しみて誓ひて云りたまはく、「この川の物を食はじ」とのりたまひき。これに由りて、その川の年魚い、御贄に進らず。」

この説話は、当面の問題を考えるにあたって、きわめて興味深い。これによれば、『播磨国風土記』の成立時点では、印南地方の豪族と天皇とがかつて婚姻関係を結んだことがあり、この地方から天皇に対して贄が貢納されていた、という伝承があったらしいことを読み取ることができる。

さらに、『播磨国風土記』の次の部分も注意される。

郡の南の海中に小嶋あり。名を南毘都麻と曰ふ。志我の高穴穂の宮に御宇しめしし天皇の御世に、丸部の臣等の始祖比古汝茅を遣りて、国の堺を定めしめたまふ。その時、吉備比古・吉備比売の二人、参迎へき。ここに、比古汝茅、吉備比売に娶ひて生める児、印南の別嬢なり。この女の端正しきこと、当時に秀れたり。その時、大帯比古の天皇、この女に娶はむと欲して下り幸行しき。別嬢聞きて、すなはち件の嶋に遁げ度りて隠び居りき。故れ、南毘都麻と曰ふ。

先の引用では、印南の別嬢の血縁関係は何も示されていなかった。しかし、ここに至ってはじめて、父は丸部の臣等の始祖の比古汝茅、母は吉備比売であることが判明する。これは、『古事記』景行天皇段では吉備臣等の祖である若建吉備津日子の女とするのとは異なっている。しかし注意すべきは、ともに吉備勢力と血縁関係があるとする点では共通していることである。そうすると、印南地方には吉備勢力と関係する地方豪族がおり、その地方豪族と天皇家との間には、かつて婚姻関係が結ばれたこともあり、それにともなって、この地方から贄が貢納されていたという伝承があったことになる<sup>11</sup>。

吉備地方の勢力と天皇家との関係は複雑であるが、かつて婚姻関係を結んでいたが、雄略天皇は吉備勢力に打撃を与え、吉備勢力が退潮していったとされている<sup>12</sup>。このことを契機として、吉備勢力

と関係を持つ印南地方の豪族と天皇家との婚姻関係の伝承は薄れていき、『播磨国風土記』にわずかに痕跡を残したとみることができよう。

さきに、『万葉集』や『延喜式』の史料によって、印南野の柏は皇位と関係があったらしいことを推測したが、以上からすると、印南地方の豪族が天皇家と婚姻関係をむすび、贄を貢納していたという伝承を基礎としていたとみることができる。

この伝承は、『万葉集』の時代には広く知られていたらしい。印南地方を海路・陸路で通過する人々が、印南に関する多くの歌を残していることがそれを示している<sup>13</sup>。中大兄皇子は、印南の海を航行する際に前掲の歌(巻1-13~15)を詠んだが、当然上記に類する伝承を知っており、それを下敷きにして詠んだとみられる。そして聖武天皇も、印南野に行幸した際には、この伝承を知っており、中大兄皇子がこの伝承を下敷きにして歌を詠んだことも知っていたと見なければならぬ。

## 7. むすび

以上から、聖武天皇は天智・天武天皇から皇位を受け継ぎ、豊旗雲を見るものとして印南野に行幸し、柏の採取を見た。これによって聖武天皇は、天皇としての正当性を示し、また、みずからもそれを確認するために印南野に行幸したと考えられる。

その上で、天智・天武天皇の皇位を継承し、食国を支配する正当な天皇として難波に行幸し、難波宮の造営工事をはじめたのであった。その意味で、聖武天皇は、みずからの皇位の正当性を象徴する宮として難波宮を造営したのである。

註)

- (1) 発掘調査によって検出された後期難波宮の遺跡が、この時聖武天皇によって造営された難波宮に相当する。以下、これらを本稿では難波宮と表現する。
- (2) 難波宮・京の造営の過程は、発掘調査の成果を抜きにして語ることはできない。これをもとにして難波宮・京について言及した最近のものに、次のようなものがある。積山洋『古代の都城と東アジア—大極殿と難波京—』(清文堂、2013年10月)、同『東アジアに開かれた古代王宮 難波宮』(新泉社、2014年8月)、大阪歴史博物館『特別展 大阪遺産 難波宮—遺跡を読み解くキーワード—』(2014年6月)、中尾芳治・栄原永遠男編『難波宮と都城制』(吉川弘文館、2014年8月)
- (3) 栄原永遠男「和歌浦と古代紀伊—木簡を手がかりに—」(『紀伊古代史研究』思文閣出版、2004年11月、初出『和歌の浦 歴史と文学』和泉書院、1993年5月)
- (4) 岡田精司「奈良時代の難波行幸と八十島祭」(『古代祭祀の史的研究』塙書房、1992年10月、初出『國學院雑誌』80-11、1979年11月)
- (5) 注2 積山洋著書
- (6) 後掲する『万葉集』巻6-935~937の笠金村の歌の題詞には「三年丙寅の秋九月十五日に、播磨国の印南野に幸す時に」とあって、『続日本紀』の出発の日付とずれている。伊藤博『万葉集釈注』は行幸の詔が出された日としている。『続日本紀』が9月27日に急に装束司・造頓宮司の任命を記すのは唐突であるから、この日付は、印南野行幸について、詔かどうかは不明だが、何らかの発表のあった日付と見るのも一案である。
- (7) この歌群の問題点の整理は、神野志隆光「中大兄の三山歌」(『セミナー万葉の歌人と作品 第1巻 初期万葉の歌人たち』、和泉書院、1999年5月)参照。また関係文献については、新谷秀夫「初期万葉関係文献目録」(同書所

- 収)
- (8) 東野治之「豊旗雲と祥瑞」(『遣唐使と正倉院』岩波書店、1992年7月、初出『万葉集研究』11、塙書房、1983年1月)
- (9) 『続日本紀』に同日条に対応する記事がある。しかし、孝謙天皇が東院に御して5位以上を宴したとあり、聖武太上天皇と光明皇太后が同道したことは見えない。
- (10) 日本古典文学全集補注151
- (11) 播磨、吉備、倭王権の三者は、相互に複雑な関係を結んでいた。これについて最近では、今津勝紀「古代播磨の「息長」伝承をめぐって」(『日本史研究』500、2004年4月)、古市晃「吉備と播磨—国境確定の意味—」(坂江渉編『風土記からみる古代の播磨』神戸新聞総合出版センター、2007年3月)、同「倭王権の支配構造とその展開」(『日本史研究』606、2013年2月)、同「古代播磨の地域社会構造—『播磨国風土記』を中心に—」(『歴史評論』770、2014年6月)などで言及されている。
- (12) 吉田晶『吉備古代史の展開』(塙書房、1995年1月)
- (13) 吉川貫一「印南野・印南都麻について」(『萬葉雜記』松蔭女子学院大学短期大学学術研究会、1982年11月)に印南野・印南都麻に関する歌の整理分析がある。

## Emperor Shomu's imperial visit to Inamino and the construction of Naniwa Palace

SAKAEHARA Towao

Emperor Shomu visited Naniwa Palace in the third year of Jinki, and, there, appointed Fujiwara-no-Umakai to Chi-zou-Naniwa-no-miya-ji to set to construct Naniwa Palace. Prior to the progress to Naniwa Palace, however, Emperor Shomu, had also visited Inamino of Harima Province. The two successive imperial visits shall be viewed to have relevance. As Emperor Shomu, in the early years of his enthronement, made imperial visits with intention to demonstrate the legitimacy of his imperial throne, his visit to Inamino may also have the same connotation.

Once, Prince Nakano-ohe had visited Inamino and saw the Toyohata-gumo, a good omen. As another prominent example, Prince Oh-ama had witnessed auspicious clouds in the midst of the Jinshin War in Nabari. Emperor Shomu, who must have been aware of both incidents, however, chose to visit Inamino because the region was known for producing oak leaves, which were offered up for rituals, such as Chinkonsai, Daijosai as well as some Setsujitsu. The tradition was stemmed from the relationship by marriage between the Imperial Family and powerful regional clans who had offered tribute to the Imperial Family.

Therefore, Emperor Shomu chose to visit Inamino, a place, closely connected with Imperial Family, to seek a good omen, and then, set forth to Naniwa Palace in order to justify himself as a successor of Emperor Tenchi and Emperor Tenmu. He ordered to construct Naniwa Palace to symbolize the legitimacy of his imperial throne.

